
分岐のある、終わりのない周回

山口樹懶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

分岐のある、終わりのない周回

【Nコード】

N5294G

【作者名】

山口樹懶

【あらすじ】

ある日、いつも通りに起きた女子高生の主人公は、部屋に吊られている数人の自分を発見する。『いつも』が狂いはじめたのは、それからだった――。

声にならない叫びが、意識の目覚めとともに、ドアがきしむような音の呻きへと変わっていく。

「あああああーっ……」

もっとも、これはわたし自身の意識で発している呻きにすぎないのだが。

毎日、この時。叫ぶ意味があるのかと毎朝わたしは考える。本能的に叫んでいるのだろうか、何故こんな音を立てるのか——ということで、解決することのないであろう疑問を解決しようとするプロセスは毎日遭遇し、毎日のように無限ループと化す。そこで考える意欲が失せて、その結果数時間後には学校で、いかにも木らしい香りを放つ机に突っ伏し、睡魔に襲われる。

これも毎日を一単位とした無限ループか、と考えている。無限ループよろしく毎日先生に怒られる。このループは完全に生活に組み込まれて、もはや苦痛でも快楽でもない。儀式としか言いような生活。

幸いなことに、その儀式に生きる意味を見出していないわけではない。毎朝の『起きるときに意味不明な言語を叫びつつ全身を屈伸させることが本能なのか、意味があるのかを考察する研究会』はどうやら毎日の日々の必要な要素の一つになっているようだ。毎日の日々にこの研究会が必要なら、それが終わるまでわたしは生きていなければならないという妙な使命感を感じている。なぜ必要な要素と言えるかというと、これも無限ループの如く毎日開催されているからだ。開催される意味がないなら、数回で終わるはずではないだろうか。

「はあああ……」わたしは、毎朝行われるこの儀式を経て、わたしの全身を完璧に覆っていた掛け布団を手で掴み、投げ出した。パジャマも昨日着た状態のまま、見事に着こなせているらしい。目を瞑

っているので実際はどうか分からないが、はだけているならば、身体のだこかに妙な寒気を感じていることだろう。そう、寝相には自信がある。

だからなのか分からないが、この枕は一点のみがへこんでいるのだ。

これはそろそろ買い換えた方がいいのだろうか。

今はもう思考したくない気分になっていたので、その件は後で検討することにしよう。

「ううっ……よっころしょ……っ」と

わたしは腹筋に現在出せる力の百パーセントを注ぎ込んだ。ゆっくりと、頭の位置が上がってきている。この時、今は何時だろうと考えていては、力が入らない。どうせ数十秒後に時計を見ることになるし、ここでは知る意欲を抑えなくてはならない。

上半身の角度が布団に対しておおよそ九十度になったところで、わたしはゆっくりと目を開けていく。まだ光は感じられない。目を開けていく。少し光が感じられたところで、瞳孔は素早くそれに反応した。

「うわ……まぶしっ……」

部屋の全体が眩しすぎて、またわたしは呻きをあげた。弱い呻き——ため息にも聞こえる——である。少しずつ部屋が見えていく。窓のカーテンは閉じている。

これが開いていたら、かなりの羞恥心を味わうものだ。女が起きる瞬間は、見世物ではない。見せたところで、九十九パーセントぐらいの男には苦情を受けるだけだろう。

わたしの周りにはわたしの安全な生活、もとい儀式を邪魔するものはいないようだ。この家はわたしだけの世界。わたしがこんな、一人の生活（とある事情があって、狭い寮のようなところで一人暮らししている）を送っているというのは学校の先生と彼氏以外知らないはずだ。盗撮という脅威もあるだろうが、あったら必ず見つける自信はある。根拠は特にないが。

映画でよく見るレーダーのように、視界がゆっくりと広がっていく。周囲のものを目で追い、捕捉していくのだ。ここで、わたしは何かおかしいことに気付いた。

「え……ちょ……」

なんと、わたしが目の前に吊られているのだ。ブレザーの学校の制服を着たわたしが、左足を天井に括り付けられている。

注視してみる。無論、いつものようにスカートの下にスパッツをはいていたので、いかがわしい『何か』は見えていないが、思い切りスカートがめくれている様はシュールとしか言いようがない。右足や両手は重力に従って、間拔けなポーズをしている。完全に目を閉じた微笑みは自分で見ても不気味である。

意外と可愛いな、などと思っては世界が終わる。

だからそんなことを考えたことなど一度もない。そんなわたしの数少ない自慢の一つ、さらさらしたショートカットの髪も酷い有様である。

思考力が戻ってきたところで、とりあえずあいつには触れない、とわたしは考えた。触って何が起ころう。これはもしかしたら一種の心霊かもしれない。いや、これは夢？夢ならどういう意味なのだろう。夢だとしても、醒めるまではその世界で生活させられるから、安心してはいけない。今更思っても遅いだろうが、かなり怖い。逃げたい。ただ、それはわたしのハイテンションな性格上、怖いとは言ってられなかった。一人きりの場所でさえ、わたしにはプライドがあった。

それにしてもこれはなんだろう、わたしはわたしではなく、あの吊られているのがわたしなのか？わたしは体型が似た他人であって、記憶を植え替えられているのか？鏡を見る勇氣は今のところない。

起きてベッドから脱出しようと横を向くと、今度は別の格好をしたわたしが今度は両手を括り付けられて吊られている。センスがない、と改めて思った。ダサいわたし。上が白い長袖のプリント入

りTシャツ——何か英文が書いてある——に黒いコートを重ねている。下はチェックのミニスカート、黒いニーソックス。でも、これは所謂『勝負服』というか、そういった気合いを入れた格好なのだ。いつもはもっとダサイ服装を着ているのである。

二度目には、さすがに恐怖は薄かったが、代わりに別の恐怖があった。合計で三人わたしがいる恐怖。わたしが三人。こう言うのと、明らかに日本語的におかしい。でも、三人本当にいるのだ。いや、よく見ると他にも何人か、わたしが吊られているらしい。彼女たちは皆、共通して微笑みの表情を浮かべているが、それぞれ違う服装、ポーズをしている。ジャージを着込み、身体全体を吊られている者。純白のワンピースだけを着て頭の一点を吊られている者。アニメに出てくるような派手なセーラー服に身を包み、どう見ても骨が折れるような格好で吊られている者さえいた。

ここまで、非日常でシュールなものをたくさん見せつけられると、これは日常でリアルな要素になりかねない。これは危険だ。わたしは、先ほど言ったわたしのハイテンションな性格上、人見知りをしない性で、初めて見たものでもすぐ馴染んでしまうのだ。この、突如現れた数人の『わたし』にもすぐに馴染んでしまうだろう。今は馴染んではないが。

わたしはいつもの日常を機械的に営むことで安心しようとしていたのか、シャワーに入ろうとした。シャワーヘッドが自分になっていたらそれこそ笑い物だ。パジャマを脱ぐ前に、風呂場の特殊な形をしたドアをゆっくり開ける。カチャ、という小気味いい鋭い音がして、開く。

「……」わたしは意味のないため息をついて、少々落胆した。

やはり現実とは思った方向に進むものではない。浴室は通常のままだった。浴槽にも誰も隠れていないようだ。

シャワーでひとまず心を落ち着けようと、パジャマの襟元に手をかけたが、不安になって浴室の方をまた見る。すると、浴室のドアと壁の境界が曖昧になっていく。エッジはグラデーションに変わっ

ていき、周囲は何にも形容できない色に変わっていく。強いて形容すれば、爽やかな印象を受ける（今までずっとこの色を見たことがなかったから、上手く形容することなど出来るわけがないが）。要は、ドアの色と壁の色とが中和され、その中間の色にでもなっているのだ。わたしの脳は、次々と起こるこの不思議を処理しきることが出来ずに、パンク寸前だった。だから、ストレートにこの現象を受け入れることしかできない。

必死に、脳の余力を探し出し、考えてみるものの、不思議は不思議のままだった。数学者や物理学者に賞金を与えてこの問題を解かんとしても、無理なのではないか。その問題を解こうとするのは偉大なことではないか。そういったことまで考えていた。自分で言うのもなんだが、全く度し難い。

気付いたときにはドアが消え、空間が消失する謎の現象は、わたしがいるこの洗面所にまで現れた。本能的に危険を感じたわたしは、先ほどの寝室、もとい『ベッドが置いてあるリビング』に戻った。リビングに行き着いたときには、わたしは息を切らしていた。まるで長距離マラソンでもしたかのように、喉に痛みが走っている。

こんなに本気で走ったのは何年ぶりだろう。陸上部をやめて、所謂帰宅部になったのは中一の時だったと記憶している。今、わたしは——思い出せない。生まれは、確か平成元年、一九八九年？の十月五日生まれで——今日は二〇〇六年十一月二十二日だ。これははつきりとしている——だから、高校何年生だろう。いや、中学？

また不思議が起きた。生年月日と現在の年月日は確かに覚えている。携帯の時計と、スケジュール帳の『誕生日』欄にはわたしの名前——『奥田由佳 オクダユカ』とある——が無機質に表示されている。念のため、本当にわたしの名前かどうか、保存している年賀状の宛名欄をいくつか見て確認したが、確からしい。で、今、何歳だろう。電卓を引き出しから取り出して手に取ってみたが、どうやって計算するかも分からない。凄くもどかしい。

今度は、簡単な問題を前に苦悶している。何よりも苦しい。ここまで苦痛を与えられると、逆に自分で可笑しくなってくる。とりあえず、自分は十八歳ということにしておこう。それが『奥田由佳』の設定だ。吊されたわたしのような視点で、わたしは、わたし自身を客観的に見ることにした。脳に、空想上の事実を記憶させていく。これはわたしが作った物語。主人公『奥田由佳』、十八歳。小柄で痩せている。ハイテンションで、クラスで目立つタイプ。その元気づげる性格から、嫌われることもある。

これで完璧、いいよ、と監督になったわたしは心の中で呟いた。脚本は存在せず、流れに任せたアドリブのみになっているが、奥田

由佳は見事にシュールな日常を演じきっている。何かどんでん返しがあると、それをわたしは強制的に戻す。何か設定を追加して、どんでん返しを意味のあるものにするのだ。さて、わたし……ではなく、主人公の奥田由佳——いや、多少違和感があるので便宜上『わたし』と呼ぶ——はそろそろ朝食を食べようとしているようだ。朝食は、朝食を食べるまでは耐え難い虚無感があたりを包んでいる。わたしは中型の冷蔵庫の前に立ち尽くした。この中には人は入れまい。もしかしたらミニチュアの自分がいるのかもしれないが、人が中にいようがいまいが驚きもせず、興味も抱かない自信はある。そう、わたしはこの世界に馴染んでしまったらしい。しっくりとした手応え。違う、わたしが馴染んだのではなかった。この世界に馴れたのは、空想上の物語のヒロイン、奥田由佳である。その設定を忘れる瞬間、わたしは『奥田由佳』になる。

「大丈夫……だよ。何も起こらない、何も起こらない……」

自分でも分かったが、魂が掃除機に吸い込まれたかのように声が小さくなっていった。そして、冷蔵庫の取っ手を掴もうとして、異変に気付いて、即座に離れた。また。また、しかし今度は冷蔵庫である。冷蔵庫の輪郭が消えかかっていることに気付いた。何故輪郭が消えるのか。何故、『浴室』と『冷蔵庫』なのだろう。朝寝ていた布団や数人のわたし、等々は消えないのか。理系であったはずのわたしに、全く論理なんてくそ食らえ、とでも言いたげである。もう、考えることは嫌になってくる。近づけばそれが消える。

だから、吊されたわたしにもう一度近づいてみるか。自棄になりながらそれを実行することにした。

「……っ……怖い……」誰にも聞かれていない。人前で怖いと言ったことのないわたしが今言っているところを。

わたしも吊られるのではないか、そういう恐怖が襲ってくる。わたしは、例の、制服を着たわたしに近づいた。今日、初めて見た、「吊られたわたし」である。制服を着たわたしの、だらしなく脱力している右足に触れようと、わたしは右手を挙げた。どうやって触

ればいいのだろう。そういった決まりなど存在しないはずだが、わたしは決まりに従う性であり、決まりがないと行動を起こせないのだ。

わたしは自分で判断して、とりあえずやさしく触れてみることにした。恐怖が頭の中を支配する。右手人差し指で触れようとして、わたしの身体に激しい痙攣が走り、めまいがした。身体の間も動かせず、まるで金縛りである。それでもわたしは重心を整えてまだ直立していた。どこまでこのようなことをされるのか、とまだわたしはしぶとく考えていた。

この世界に馴染んだと言っても、やはりいつもの世界の方がよほどいいものである。先が読める世界の方が好きだ。そう考えていたりすると、適度な重心の位置を見失って、倒れた。視界がゆっくりと傾きつつ、地面に落ちる感覚。一度死を経験したつもりになった。倒れた後は、難なく身体が動いた。少し腕を動かしてみると、軽々と身体が動き、なんとも言えないような快感に襲われた。快感、恐怖、期待など。様々な感情の糸が頭の中で重なり、お互いに巻き付いて、一本の太い糸を作っている。その糸はもはや感情ではない。それこそが吊られているわたしである気もした。妄想上の人物なのだ。

なら、どこにどういった意味があるのか。意味がない物質は理解できない。どこに意味がない物質を見出せばいいのか。外か？空にわたしが吊られていたら、その意味は分からないし、それこそ大変な事態である。危険すぎる。でも、外にわたしがいたら、という訳の分からない希望を抱え、外に出ようかと一瞬考えた。でも、それもいいかもしれない。

そうして、わたしは外に出ることにした。といっても、たった数メートルの半径の様子を探るだけである。ドアを半ば蹴るように、思い切り開ける。その乱暴な開け方とは逆に、穏やかな音を発しつつ開くドア。目の前にはいたって普通の景色。道路。そこに、今度は、制服を着たわたしの彼氏が吊られ……ているのではなく、直立

してこちらを見つめている。この状況で見つめられても、ただ緊張するのみだ。名前は……思い出せない。いつの間にわたしはこんな女になったんだろう。彼氏の名前を忘れるなんて、世界最低の女である。彼氏は話しかけてくる。

「由佳、どうしたん？」無表情で、極めて不自然な喋り方。

いつもとは違う彼氏に返答など出来るわけもなく、わたしは家に戻って、ドアを閉めてから慌てて鍵を閉めた。

一気に高まっていく心拍数。

今でも身の危険を感じていて、本能で安全な場所を探している。突然ドアが壊れて彼氏が入ってくるかもしれない。怖い。後ろで何か連続する音がして、それは次第にわたしに向かって近づいている。後ろを振り向くと、そこにはわたしがいた。五、六人程度だろう。包丁を持って近づいている。その恐怖にわたしは泣け叫びそうになりつつ、ドアを急いで開け、家の外に出た。人は他にいない。道路に車は一台も走っていない。その道路の端を、全速力で走った。ただ、恐怖だけを見ながら走った。何も聞こえない。

疲れるまで走ると、立ち止まって周囲を見た。通行人が何人もいる。後ろで赤い、小さい車がクラクションを鳴らしながら迫っている。わたしの足が何かに引っかかったのか、歩道の方に転んだ。すぐ起き上がり、また後ろを見た。もう、わたしはいまい。ここまで走ってきた過程を思い出しつつ、帰ることにした。走った過程を思い出すと、自然に涙が垂れて、頬を伝った。もう、わたしは何を見ている？数人の自分が現れたのは、夢か現実か。今の普遍の世界は、夢か現実か。それがどちらであったとしても、わたしには関係ないような、くだらないものである。大切なのは次に何が起こるかということ。世界の真相、正体などそれほど重要なものではない。この世界に何が起きるか、それを知っていれば十分だ。

わたしは、家のあるはずの場所で立ち尽くした。そこには、ただただ明るい色をした雑草しか生えていなかった。荒れている。所謂、空き地状態なのだ。だが、もう物質が消えることには馴れている。

馴れてしまった。近くの学校のスピーカーから、わたしの声が聞こえてくる。

「由佳、そろそろ死んだ方がいいから」と冷やかすように、笑いながら、「奥・田・由・佳・ちゃん？この世界は夢に冒されかけている。いずれ夢が現実を塗りつぶして、全てのことが物理法則に矛盾する世界がつくられる。そこに人間と、その意識は存在してはならない、と国際法で定められている。夢世界では、わたしを含めて、人民が全て個人で世界を成していて、その世界が現実世界の混沌を造り始めている。混沌が終了した瞬間、夢世界が現実となる」

「……」何も言えなくなった自分。喋ることはできるが、何を言ってもこの世界では異端と見なされる気がして。だから、何も言わない。

「理解しにくいだろうけど、仕方ないよ。すでに由佳は国際法を破ったどころか、いくつかの物質を消滅させたうえに、二十人の殺人を犯している。被害者の名前は皆、奥田由佳。自分の意識を殺しているの、由佳は。夢世界の新政府は、『自我の精神的殺害』と呼び、これに対して死刑を定めている。わたしは新政府軍の最高司令官、奥田由佳元帥。現実世界の由佳に代わって生きることにした。だから現実の由佳はもう十分。死んでもらう。自衛隊との共同作戦で殺しに行くから、それまで夢世界のことを想像してれば？」

もう理解する、しないの問題ではなかった。生き抜いてやる、そういう気持ちはなかった。でも、わたしは何をすればいいのだろう。その無限ループはもう感情のない儀式ではなく、避けたい苦痛になっていた。終わりのない無限ループが始まっている。新政府？馬鹿げている。

突然、どこからか攻撃ヘリが飛んできて、二十メートル程度の高さを旋回しつつ、機首をわたしのほうに向けた。ダッダッと重い音を発して唸りながら。機銃らしき筒は、わたしを見つめている。その攻撃ヘリの後ろで、パラパラと軽い音の輸送ヘリがゆっくりと降下し、二十人程度の戦闘服を着た自衛官たちを降ろした。自衛官た

ちは小銃を構えながら、わたしに近づいてくる。とりあえず、映画よろしく手を挙げてみることにした。震える手をコントロールして、頭の上に掲げていく。そして、隊長格の男が叫んだ。「動くな！銃を下ろして！我々はお前の犯罪を歓迎する！」「銃はないんだな？ よし、近づいて殴れ秋田！」

「わかりました！」

秋田と呼ぶらしい若い隊員は叫び、腰から携帯スコップを取り出して振り上げながらわたしに向かって突進した。わたしに近づいたところで秋田はわたしの左腰をスコップで殴り、直後に防弾ヘルメットを投げつけてきた。

骨に痛みは直接伝わり、その痛みはわたしを叫ばせた。ふと空を仰ぎ見ると、自分の顔が数メートル上空で浮遊していた。反転しているわけではなく、顔はしっかりとわたしを見据えている。瞬き一つしていない。その顔から糸が伸びていき、それは空の果てまでまっすぐ伸びていった。顔も吊られているようだ。そして、浴室や冷蔵庫に起こった現象が、ついにわたしの身体にも起き始めたらしい。ただ、それに対していかなる感情もわたしは抱かなかった。全身を刺すような激痛が襲いはじめて、わたしの身体の輪郭は薄くなっていく。意識が朦朧としていく。わたしの毎朝の無限ループは終わったはずだ。新たな始まりは見えなかった。わたしには、だが。

身体が重い。動きにくい。わたしは死んだのか。最終的にあの状況で殺されたのは間違いないだろう。だが、死んだならどうしてわたしは考えているのか。意識も割と鮮明である。思い切って、目を見開いてみることにした。

部屋にいる。あの、わたしが何人も吊られていた部屋。なんと、わたしは立っているようである。視点が高かった。目の前でわたしが寝ている。そこでわたしは悟った。わたしは吊られていると――。どうやら、全身を気をつけの姿勢で拘束されていて、それを首から吊られているようだ。首が吊られているのにも関わらず、痛くも苦しくもなかった。それどころか、吊されているのも悪くないと思った。今までの、恐怖に震える自分を見下ろしているのだ。これがまた、快感なのだ。

今までの自分を苛めつつ、今の自分もある意味苛められている。サディズムともマゾヒズムとも取れる、新次元の性的嗜好。これを自らの身体を以て体験したわたしは、フロイトを超えたつもりになった。

フロイトを超えたところで、わたしは、すぐ下のわたしを見た。そのわたしの表情――かもしれない何かを見て、一瞬の間吐き気がこみ上げていた。わたしに、顔がない。顔があるべき部分には、何もない。何もない空間は、エロティック以外の何でもない、肌色の奇麗な曲線を描いている。

わたしのことを睨んでいるのだろうか。気づいていないのだろうか。見て見ぬ振りをしているのか。そんな些細なことが気になり、わたしはこの拘束から逃れようと身体を捻り、暴れた。わたしを拘束している綱は天井に繋がれ、わたしがもがく度にギーンと唸る。

また、下にいるわたしに目をやってみると、わたしがもがく度に彼女は頭を押さえて苦しんでいる。何故だろうか、わたしはそんな

ことは考えなかった。今のわたしにはその光景がただ、楽しくてたまらなかった。

「……う……痛い……よお……」

わたしはひたすらもがき続けた。数分の間、自分が脱出することなどどうでも良かった。目の前のわたしは痛みに耐えようとしている。だが、ずっと暴れていると、さすがに身体が疲労してくる。そこでわたしは正気を取り戻した。わたしは脱出しようとしているのだ、と。

この技巧か凝らされている拘束から抜け出すには、ただ暴れるだけでは意味がない。工夫をしなければならぬ。わたしは唯一動く頭を上に向けて、わたしを吊る綱の根元を見ようとした。あと数度の角度で見られそうな所であったが、それ以上は頭が動かなかった。これは一つの苦痛。見えそうで見えない。それはまた快感になりかけている。

急に、綱にも、あの現象が現れ始めた。綱の輪郭が曖昧になっていく。しかし、今度は綱が周囲の色と溶け合うのではなく、綱が一方的に透明化していった。綱が透明化していき、わたしの全身を晒す。

わたしは今、ワンピースを着ているようである。その下は何も着ていない、裸。裾は膝上まで。色は幽霊などを連想させるような、艶消しのような白。決して清楚なイメージはなかった。

綱が透明化していくうちに、綱は物質としての尊厳を失い、消滅した。わたしの身体を支えるものが消えたので、わたしは地に墜ちた。わずか50cmほどの高さにいたというのに、両足で着地した瞬間、両膝と両足の付け根に何とも言い難い激痛が走った。その痛みは断続的に襲ってきたので、ついにわたしはその痛みに耐えられず、バランスを崩して地面に倒れた。痛みは、強風の中の湯気のように、痕跡を残さず消え去った。気づけば、自分以外の自分は全て消えて、この部屋の中が本当の意味で一人だけになった。

地面に寝そべる。もうこの際、これが現実であつたって夢であつ

たって、どうでもいい。自分が自分でもなくてもいい。今なら殺されてもいい。いったい、自分が何のために生きているかもわからない。こんな世界は捨てた。地獄ならこの世界よりはマシかもしれない。

制限された、現実に関わりなく近いようで、シニカルな終わらないこの夢。その中の自由など取るに足らない。中途半端な自由は嫌になる。だから、究極の自由をつかむために、わたしはいつかこの夢の世界から、醒めてみせる。醒めた暁には、現実以上の、平和的な自由が手に入れられるだろう。果たして、何を以て『醒める』と表現するのか知らないが、醒めたと自覚できる頃には究極の自由を手に行っているだろう。その自由を行使して、わたしは『醒める』を定義しようと思う。

夢から覚めるには、どうすればいいだろうか。「夢の中で死」ねばいいのかもしれない。そう思ったわたしは、包丁を取り出して、刃の先をわたし自身に向けてみた。何故か恐怖はないものの、どこを刺せば一撃で簡単に死ぬるのかわからなかった。大量出血を狙って、胸に刃を向けた。刺そうと決意した瞬間に、視界は例の何にも形容できない色にパッと変わり、ベッドに瞬間移動した。寝ていたようだ。要は、「自殺すると、死ぬ、起きる、の無限ループになる」のだ。なら、この無限ループから分岐して、別のプログラムルーチンに進み、終了を探ればいい。別の方法で、この夢から抜け出せばいい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5294g/>

分岐のある、終わりのない周回

2010年10月11日01時40分発行